

エピソード2 清掃員を誘拐してみた

「……はっ、ここは!?!」

清掃員の三須倉 秋人（みすぐら あきひと）はやつとのことと目を覚ました。彼は目を瞬かせて周囲を見渡す。そこは薄暗い部屋の中、照明の類は何もなく、小さな天窓から僅かな光が差すのみであった。家具やカーペットなど人間味のある代物は悉く駆逐されており、木で造られた簡素な椅子とテーブルが一つずつだけそこにある。部屋自体が石でできているようで、温かみは欠片もなくその床はひどく冷たかった。まるで牢屋のよう、というか牢屋そのものであるように思えた。

当然ながら、秋人にとつてそこは見知らぬ場所であった。彼は落ちて着いて前日のことを思い出す。自分は昨日、清掃員のバイトとして懸命にトイレを掃除していた。男子トイレは予想以上に汚れていて、また悪臭がひどく、綺麗にするのにひどく難儀したという記憶があった。そして、その後に近くの自販機の前でコーヒーを飲みながら一服したことも記憶していた。しかし、それからの記憶がすっぽり抜けていた。どれだけ必死に想起したとしても、微塵とも思い出すことができず、まるで堅い岩盤にツルハシを振るっているかのようなようであった。つまり、どうしてこのような場所にいるかはさっぱりだったのだ。

それでも、なにか手掛かりはないかどうか、記憶の中に潜行して情報を収集していく。しかし、やはりそれらしい手掛かりは見つからなかった。脳みそに検索機能があればなあとそんなことを考えていた秋人はふと、肌寒さを覚えた。そして、やっと自分が全裸の状態、しかも縄によって雁字搦めにされていることに気づいた。その事実から秋人はひどく動揺した。彼は満腔の力を振り絞り、その状態からの脱却を図ったが、結局は無駄な努力であった。縄から抜け出すことも、その場から逃げ出すこともできなかった。

秋人は深いため息を吐く。その時、ガチャリと部屋の鉄扉が開いた。「あ、目が覚めたんですね」

そこから現れたのは信じられないほどの美少女であった。艶やかに舞う漆黒の黒髪、血色のいい肌、目を見張るほどの美貌、完璧な黄金比を辿るスタイル、それにばっちりと見合った制服、それは秋人が今までに出会った女性の中で最も美人だと思える女の子であった。不覚

にも、彼の心臓は大きく高鳴った。

「うふふ……」

美少女は妖艶な微笑みを浮かべながら婉然たる動作で歩み寄る。秋人は啞然としながら彼女に訊ねる。

「あ、あんた……いったい、だれだ……?」

「私? 私の名前は小野原 来夢。あなたを攫った張本人ですよ?」

「攫ったって……まさか、あんたが巷で噂の……」

「ま、そういうことですね。私が連続誘拐の犯人なんです」

来夢はさらりと言い放つ。

「……まさか、誘拐犯がこんなに若い女の子だとはな。たまげたぜ」

「誘拐なんて簡単ですよ? ちょっと隙を突けばいいだけなもの」

「俺はまんまと隙を突かれましたってわけか」

「そういうこと。ご愁傷様ね」

「……それで」

「ん?」来夢は小首を傾げる。

「それで……俺をいったいどうするつもりなんだ? 身代金でも要求するのか? 残念ながら俺は一銭にもなりやしないぜ。早いとこ解放しちまった方がいいと思うがな」

「いったいどうするつもり……ふふん、いいでしょう。その体に分からせてあげます」

来夢は秋人の前でしゃがみ込む。そして、そっと顔を寄せた。

「うおっ、な、なんだよ!」

秋人は眼前に広がる来夢の綺麗な顔を見てわずかに頬を染める。人形のような美麗な尊顔は彼の心を強く揺さぶった。もしかしてキスされるのでは——下衆な心が彼の内を席卷し始める。しかし、その考えは刹那に打ち碎かれることになった。

来夢は秋人の顔の前で口を大きく開く。そして——

「ぐえええええぶっ、ぐぶうえええええっ」

秋人の鼻先に強烈なゲップを浴びせかけた。

「……え?」

秋人は妄想と現実の乖離に呆然とする。唇を奪われるかと思っていたというのに、まさか顔面にゲップを浴びせられるなんて。ポカんと口を開けた秋人の鼻元にもわりとした空気団が直撃する。彼はふと鼻を鳴らした。その瞬間——

縄で雁字搦めにされている以上、抵抗の手段はほぼ皆無であった。精々、彼女から顔を背けるくらいのことしかできなかった。

しかし、来夢は秋人の最後の手段ですら篡奪した。

「……はむっ」

「っ!？」

来夢はなんとその可愛いお口で彼の鼻を啜ってしまったのだ。ゲツプの残り香が彼の鼻を刺激する。もはや顔を背けることはできない。秋人が生命活動を続けるためには、来夢の口から放たれる激臭ゲツプを鼻から吸い込むしかないのである。

来夢は溜まった空気を一気に流動させる。そして――

「ん……ぐぶえつぐぶうううえええええつ」

秋人の鼻腔内に直接ゲツプを吹きかけた。

「んむうううううううううううううう!!」

ゼロ距離ゲツプをもろに浴びた秋人はその臭さに悶えに悶える。その量も、臭いも、先刻のゲツプ以上のもので、美少女が発する臭いだとはとも思えなかった。嘔吐物が放つような強烈な酸っぱい臭いが鼻腔全体を侵食し、その後にごみを煮詰めたような悪臭が最悪の後味を残す。秋人も清掃員として働く以上嫌な臭いは嗅ぎ慣れているはずなのだが、来夢のゲツプの悪臭は彼の経験値なぞ容易に凌駕するものであった。彼はあまりの激臭に目を回した。

気持ちよくゲツプを放ち、満足した来夢は鼻から口を離す。そして、無邪気で清純な笑顔を見せた。

「どう？ 私のゲツプ、いい香りだったでしょ？」

「うぐ、ぐ、う、うえつ、ううううえええつ!」

当然ながら秋人は来夢の問いかけに答えられるような状態ではなく、涙を流しながらええつぐばかりであった。吐瀉物を撒き散らすような事態にならなかつたのは不幸中の幸いであった。口を密閉された状態での嘔吐は逆流の危険性を伴うからだ。

「うふふ、なんだかあなた苦しそうですね。死んじやったら可哀想だし、お口で呼吸させてあげます」

来夢はわずかばかりの慈悲の心で秋人の口から手を離れた。秋人は解放された途端、荒い呼吸を繰り返す。

「ぜえーはあー、ぜえーはあー、う、おえっ! う、く、くそお……」

「大丈夫う？ そんなに苦しそうにしちゃって、どうしたんですか？」

「ど、うしたって……あんたのゲップが、くさすぎるんだよ……いったい、どうなってるんだ」

「あら、そうなんですか。それは「めんないね」来夢は軽く平謝り。「でも、これくらいの臭いには耐えられないとダメですよ。だってあなたには私の『お掃除』をしてもらうんだもの」

「……は？」

ポカンと間抜け面をする秋人の目の前で、来夢はすると服を脱ぎ始める。ゆっくりと丁寧に焦らすようにワイシャツを脱ぎ、マシユマロのようなその柔肌を晒していく。彼女の妖艶な仕草に思わず魅了されかけた秋人であったが、やがてすぐに顔を顰めた。

秋人の鼻先に臭った異臭。先ほどのゲップとはまた性質を異とする不快な悪臭である。彼女が衣類を脱いでいくにつれ、その悪臭も濃密なものへと昇華され、やがて彼女が靴下以外の服を全て脱ぎ捨てた頃には耐え難い汚臭が部屋中に充満していた。

秋人はその臭いを嗅がないように口で呼吸をするが、それでも悪臭が鼻につく。その悪臭の根源はどう考えても目の前の美少女であった。美しき裸体を披露する小野原 来夢であった。

靴下一丁になった来夢は汚臭に包まれながら楽しそうに微笑んでいた。そして、まるで玩具を目の前にした少女のように瞳を輝かせるのだ。

「さあ、それでは早速お掃除をしてもらいましょうか」

「お、お掃除って……いったい……」

「あら、あなた清掃員でしょう？ お掃除をすることがお仕事なのでしょう？ だったら……分かりますよね？」

「わ、わかんねえよ。それに、掃除の道具もないし……」

「道具ならあるじゃない。ほら私の目の前に」

来夢は秋人の目をじっと見つめる。その真意に気づいた秋人は恐怖に体を震わせた。

「どど、道具ってまさか……まさか……」

「そうですよ。あなたよあーなた。あなたが道具になって私の体をお掃除するんですよ。その可愛いお口と舌でぺろぺろって私の全身を舐め回すの。ね？ 分かりました？ あ、ちなみに、私、**3週間**くらいお風呂入ってないから、ちよっぴり臭っちゃうかもしれないけど、ま、あなたなら大丈夫ですよ。だってあなたは汚れたものを綺麗に

する清掃員だものね」

「あ、ああ……うあ……」

心底楽しそうに微笑む来夢に、秋人はただただ怯えた。今やその目も眩むほどの笑顔も彼にとっては恐怖の対象でしかなかった。これだけの汚臭を放つ彼女の体を舐め回すなんて、清掃員であろうとなかろうとも尋常ならざる苦痛を味わうことになるだろう。秋人の頬を油汗が伝う。不可避の絶望が瞬く間に彼を侵食した。

「さ、それじゃあ早速ナメナメしましょうね」

「い、いやだ！ やめろ、やめてくれっ!!」

「うふふ、逃がしませんよ。私のくっさあらい香りがなくなるまで、全身の隅々まできれくくいに舐め尽くしてもらうんですから。ま、逃げられるものなら逃げてみてくださいください？ どうせ無理でしょうけどね」

来夢は愉快愉快と笑顔を湛えながら秋人の傍にしゃがみ込む。

「さて、それじゃあま・ず・はあ。私の腋をお掃除してもらおうかしら」

「わ、わき……?」

「そうよ、私のわき。それびろろろろ」

来夢は腕をゆっくり上げると自分の腋を秋人に見せつけた。その腋を見た秋人は思わず顔を引き攣らせる。来夢の腋は美少女のものとは思えないほど悲惨な状態となっていた。男らしい腋毛が密林の如く生い茂り、しかも大量の汗で湿りに湿っていた。放たれる腋臭も並々ならぬもので、タマネギの腐ったような臭いがしきりに秋人の鼻腔を刺激する。悪臭にえずくと共に秋人は怯えた。そして、震えた。

これからこの腋を掃除しなければならぬなんて――

ぬらぬらとてかる腋毛が秋人を誘う。そこは地獄の入り口にしか見えなかった。

「さ、舐めてください?」

来夢は笑顔を絶やさずに無慈悲な宣告を告げる。

「い、いや……いやです……」

「……舐めなさい?」

「む、無理……無理だよ。な、なあ普通に洗えばいいじゃないか。なんでこんなことを……」

「……舐めなさい?」

「だ、第一こんなの……監禁なんて犯罪だぞ？ お、お前捕まったらどうするんだよ。なあ解放してくれたら、俺、バラさないからさあ。なあ頼むよ、見逃してくれよ……」

「……さっさと舐めろ」

「っ!!」

来夢の冷酷な表情に秋人は心の底から恐怖する。豚や羽虫を見下すような蔑みの視線。人としての尊厳を打ち砕くその鋭い目つき。秋人は自分が来夢にとって本当に道具としての価値しかないことを悟った。彼は蛇に睨まれた蛙のようにそのまま固まった。来夢から視線を逸し、ただただ震えた。

「……そう、そんなに舐めたくないならいい」

「え……?」

「私が無理矢理舐めさせてあげますから」

「な……むぐうっ!」

来夢は無表情のまま汚臭漂う腋を秋人の顔面に密着させ、力強くぐりぐりと擦りつけた。ぐちゆり、ぐちゆりと腋汗が汚らしい音色を奏でる。そして、濃密な悪臭が秋人の鼻腔を満たしていく。腋臭特有のネギやタマネギを発酵させたような臭いがツンと鼻を刺し、汗によって熟成された納豆のような臭いがネットリと漂う。それに加え、来夢の腋毛がまるでブラシのように秋人の顔面に濃厚な汗を塗りたくっていく。彼女の腋汗に顔面を侵されていく感覚はこの上なく不快であった。

「ほらほら早く舐めなさい？ このままじゃ終わりませんよお?」

「んむくんぐくく」

「キレイになつたら止めてあげるから。さ、舐めろ?」

秋人の感じる悪臭はますます激化していく。来夢の腋は現在進行形で汗をかき続け、その汗臭をさらに濃密なものへと変化させていくのだ。このままでは死んでしまう——一刻も早く解放されたい秋人は彼女の言葉を信じ、恐る恐る舌を伸ばした。彼の舌が来夢の腋毛に触れる。その瞬間——

「~~~~~!!」

秋人の口の中に広がるとてもない悪臭、そして、塩っ辛く不快な味。わずかに舌が触れただけでこれだけの威力。彼女の熟成された腋は完全なる悪臭兵器と化していた。どれだけ屈強で頑強な男であろう

ともこの腋に舌を這わせることは不可能であるように思えた。

しかし、秋人はどうしても来夢の腋を舐めなければならなかった。彼女の命令を無視したらこれ以上どんな目に遭わされるか分かったものではないからだ。彼はこみ上げる嘔吐感を必死に堪えながら来夢の腋をペロペロと舐め始めた。彼の口内に大量の腋汗エキスが混入し、彼を徹底的に責め立てた。薄暗い部屋に粘着質な音が響き渡る。

ぺちやびちや、ぬちゅ、ぬるぬる、ぴちやぴちや、べちやあ——

その音を聞き、来夢はいやらしく微笑む。

「んふふ、いい子いい子。最初からそうやって舐めてくれればよかったのに」

「んぐ、ぶちゅう……んむうぐ」

「ほらほら、こっちの腋もきちんと舐めなさい？ くっさい腋の臭いでムンムンですよ？」

「ぶべべつぶぎゅううああぐぐ」

来夢は交互に腋を入れ替えながら秋人に舐めさせる。

秋人は彼女の腋に為す術もなく、ただひたすらに舌を這わせるしかなかった。彼は死にかけの鶏のような声を上げながら悶え苦しむ。来夢の腋臭が、腋汗が、彼の脳を腐敗させていく。シナプスが弾け、細胞が壊れていく。精神が崩壊するのも時間の問題であった。

やがて、それから数分後、やっと秋人は来夢の腋責めから解放された。彼はもうすでに心身共にポロポロであった。彼は涙と鼻水を垂らしながら荒い呼吸を繰り返していた。

来夢は自分の腋を臭ってくすりと微笑む。

「うん、割といい感じでしたよ。さすがは清掃員さん。いい仕事してくれるんですね。うふふっ」

来夢は秋人のことを褒め称えるが、彼はなにも聞いていなかった。ただ薄れゆく意識を保つことに徹するばかりであった。

「さて、それじゃ次のステップに移ろうかしら」

来夢は楽しそうに微笑むと無機質な木の椅子を引き寄せた。そして、それに座ると、秋人に足を差し出した。そして、来夢は彼に告げた。

「さっ、今度は私の足を臭ってください？」

「……え？」

秋人は虚ろな目で来夢を見上げる。もうすでに心神喪失寸前といった様子であった。

「この靴下もね、三週間くらい履きっぱなしだからクサくてクサくて仕方がないですよねえ。ほら、こんなに離れてるけれど、くっさく足の臭いがぷくんってするでしょう？ 汗でビチャビチャでムレムレなの。このままじゃ私も困っちゃいます。だくからく、私の靴下をくんくん嗅いで、脱臭してほしいんです。ね？ お願い」

来夢は猫撫で声で靴下の臭いを嗅ぐことを秋人にお願する。その要請に対し、当然ながらこれ以上臭い責めによって苦しめられたい彼は必死に首を横に振るのだが――

「あらそう、私の靴下嗅いでくれるんですね？ ありがとう、清掃員さんっ」

しかし、秋人の意志が尊重されることはなく、汚臭を放つ来夢の靴下が彼の鼻先へと伸びる。彼の視界は黒い布に埋め尽くされ、やがて、判を押すかのように、ずむりと来夢の足裏が秋人の顔面に押し付けられた。

「~~~~~!!」

来夢の足臭は彼女の腋臭よりもさらに強烈な臭いであった。三週間熟成させただけあってその汚臭は目眩を引き起こすほど凄まじく、納豆の臭いや腐ったスルメの臭いや発酵した汗の臭いが濃密にシエイクされていた。濃厚な足臭だ。じわあと靴下に含まれていた汗が染み出し、不快な足汁が彼の顔面を飲み込んでいく。

「ほらほらくちやんと嗅いでください？ くっさい臭いがなくなるまで、ずっと嗅がせ続けますからね？」

「うぶぐつがばあああああっ！」

大声で悶える秋人を無視し、来夢はぐりぐりと湿った足裏を押し付ける。秋人が口で呼吸をしようとするのを見通した彼女は踵で彼の口を塞ぎ、鼻でしか呼吸できないようにした。万全の状態で自慢の足臭を存分に嗅がせていく。彼女の足裏はもうもうと湯気を放ちながら、強烈な悪臭を鼻先に注ぎ込む。彼の鼻腔は来夢の足の臭いで充満してしまった。

足臭を嗅がせながら来夢は微笑む。

「全く、こんなことでだらしないですねえ。いい？ あなたが嗅いでいるのはただの足の臭いなんですよ？ 女子○生の足のニ・オ・イ。分かりますよね、清掃員さん？」

「うぐ、ううおえええっ！ がはあっ！」

「それなのに、こおるんなに苦しんじゃって。男として情けなくないんですか？ ただちよっぴり臭っちゃうだけじゃないですかあ。もう少し頑張ってくださいよ。ほらファイトおろろ」

「むぐっぐうあああああつっ！」
もちろん、来夢の足臭はただの足の臭いと割り切れるような臭いではない。様々な悪臭がここぞとばかりに大暴れする、まさに悪臭の甲子園のような状態だ。

来夢は元来、そこまで足の臭いがキツイ体質ではないのだが、それでも三週間の熟成は地獄のような悪臭を形成させるのには十分なものであった。そして、それは成年男性を瀕死に追いやったとしてもなんら不思議ではないものであった。彼女の足裏はそれほどまでの激臭を放っているのだ。いくら美少女であっても、汗や垢によって足が臭くなるという事実は変わりないのである。

「むぐ、ふぐっあつ、ぐぐがあつっ！」

豚のように鼻を鳴らしながら足の臭いを嗅ぐ——嗅がざるを得ない状態であるわけなのだが——秋人はその臭さに慣れるなんてこともなく、濃密な悪臭に延々と苦しむこととなる。来夢の靴下の汗がじわりと鼻腔内に侵入し、彼の嗅覚を直接刺激する。毒のシロップがドロドロと彼を汚染する。彼の顔中は足汁塗れで、その熱気もムンムンであった。強烈な足臭はじわじわと彼の体力を奪い去り、足臭へのトラウマを植え付ける。彼の思考はもはやただ一つ。この足臭責めが早く終わることを願うばかりであった。

しかし、どれだけ願ったところで叶うかどうかはまた別問題であった。来夢の指令は臭いを嗅いで、靴下の臭いを消臭することである。当然ながら鼻で臭気を吸い込んだところで靴下の臭いが消えるわけではない。然るべき手段によって洗濯し、不断の努力によってその汚れを落とさぬ限り、彼女の強烈な足臭が消えるはずがない。彼の頭に一抹の不安が過る。まさか、このまま足臭責めから解放されないのではないか——

そんな秋人の不安も露知らず、来夢は徹底的に彼を弄ぶ。

「ふふっ、ちやあんとくんくんしてくれて、本当にイイ子ですねぇ。ほら、片方だけじゃなくて、こっちの足の臭いも嗅いでください？」

「む、ぐがああああああろろ！」

「それっ、右、左、右、左、右、左。もっと自分から顔を押し付けて、